
恋のカレイドスコープ

瑠璃色の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のカレイドスコープ

【Nコード】

N4373J

【作者名】

瑠璃色の墮天使

【あらすじ】

第六弾。

いつまで持つか分かりませんが。

ミンミンミンミン

「うんざりする暑さだな……」

手ではたばた扇いでも、焼け石に水だった。

「何でこんなに毎日毎日暑いんだ、馬鹿やるーーーー！
熱せられ過ぎて、ばったり倒れたらどうしてくれるんだ！！！」

自分の部屋で、俺は夏の暑さの理不尽さを喚き散らす。

我ながらみっともない事この上ないが、いらいらしているのだ。

「はあ……もうお盆も過ぎたっていうのに何故、このように暑い？

これはきつと某国の陰謀だ。

俺を陥れるために、このように気候を上昇させているに違いない！」

うむ、我ながらぴったりの推理だ。

なんとなく、自分でもそんな気がしてきた。

「そして来たる二学期に提出しなければならない宿題をやらせまいと、

あらゆる妨害をかけているのだ。

そう！この暑さのように！！

黒幕は・・・北川だな、うん、そうに違いない。

こうして宿題が出来ずに俺が悩んでいるのも、

扇風機しかない部屋で暑さに苦しんでいるのも、北川のせいだー
「！！！」

とりあえず奴のせいにしておけば、全てオツケー。

「祐一、むちゃくちゃ言ってるよ」

「おわ！？名雪、何時の間に！？」

いつ俺の部屋に入ってきたのか、名雪が部屋のドアの前にいた。

「い、いつはいつてきた、お前・・・」

「えーと・・・『もうお盆が・・・』ってところあたりからだよ」

「おのれ、こっそり入ってくるとは礼儀知らずだぞ。」

部屋に入る時はきちんとノック。これは人間として常識だ」

「ちゃんとノックしたよ。祐一が聞いてなかったただだよ」

「ぐはあ、そうだったのか！？」

どうやら喚いていて、名雪のノックに気がつかなかったようだ。

最大の不覚だ・・・

「北川君のせいにしちゃ駄目だよ、祐一。」

ずっと遊んではかりいた祐一が悪いんだから」

そういわれると、俺としてもいい返せない。

夏休みとはいえ、さすがにちょっと遊び過ぎた……

「名雪、俺を助けると思って、宿題のノートを見せてくれ」

「またそんな事をいって……駄目だよ。自分できっちりやらないと身につかないよ」

「そんな常識的な事をいっても、俺はだまされんぞ」

「騙してないよ、祐一の為なんだからね」

何か最近、俺の保護者みたいな言動が増えてないか、名雪？

うーむ……

「まあとにかく俺は宿題でいそがしんだ。生憎お前の相手をする暇はない。」

さあでてった、でてった」

俺は手をひらひらさせて、机に向かう。

名雪の相手をするほど暇じゃない。

「うっ、祐一、意地悪だよ」

「暇なら真琴と遊べばいいだろ。どうせ暇だろ、あいつ」

「ううん、天野さんの所に遊びにいくって出ていったよ」

おのれー、人が暑さに耐えつつ頑張っているのに、遊びにいくとは！
今日は漫画、読んでやらんからな！

「じゃあ秋子さんの家事の手伝いでもするとか？喜ぶぞ。
世界一の親孝行者として、学校で表彰されるかもしれん」

「そんな事は絶対無いよ！それにお母さん、買い物に出てるし・・・」

秋子さん、この暑さの中でも涼しそうにてきぱきしているからな。

あの人は本当にすごいと思う。

「じゃあテレビでも見てこい。生憎、今日は気合モード100パーセントだ。」

苺を摘まれてもなびかないぞ」

「うー、美味しいのにー。でも、忙しいなら仕方ないよね。
お邪魔しました」

そういつて、名雪は部屋を出ていった。

「うーん・・・」

ちょっと可哀相だったかな。

早めにノルマを達成して、トランプでも一緒にするか。

「最近こってるからな、あいつ……………」

夏休みを利用して、一度真琴と三人で徹夜してゲームをしたほどだ。

「さてと、続きをやるかな」

俺は教科書を開いて、宿題に取り組もうとした時、

ピンポン

うん？誰か来たのか？

「はい！今きます〜」

名雪が階段を降りて、応対に向かう。

まあ、名雪に任せておこう。どうせ勧誘か何かだろう。

俺はノートを広げて、一つ一つ問題に取り組む。

『・・・んにちわ、名雪さ・・・』

「あ、栞・・・ん、いら・・・やい」

へ、栞？

シャープペンを止めて、俺は聞き耳をたてる。

『今日も暑いですね、名雪さん』

『本当だよね、わたしももうへろへろだよ』

栞の奴、遊びに来たのかな？

うちに直接来るとは珍しいな・・・

『ははは、お姉ちゃんも家では薄着で行動していますよ』

『香里もこの暑さにはたまらないみたいだね』

香里が薄着か……ごくり……

いかん、いかん！！思いつきり想像してしまった！！

……今度栞の家に突然お邪魔しようかな……

『所で祐一さんはいますか？』

『祐一に会いに来たんだ。仲がいいね♪』

『恥ずかしいですよ……名雪さん』

栞の照れた笑顔が、何か想像つくな……

『くすくす……祐一は今部屋にいるよ。』

でもごめんね、栞ちゃん。祐一には今、あえないんだよ』

『え……？どういう事ですか？』

待て待て待て！！あいつ、まさか！！

俺は椅子から立ち上がる。

『うん、祐一今勉強ですごくいそがしいみたいで、今日は一日頑張るから邪魔しないでくれてさっき言われた所なんだ。』

本当にごめんね、栞ちゃん』

『そうですか・・・でしたら、仕方ないですね。祐一さんに頑張って下さいって伝えて下さい』

「だー、ちょっと待てー！ー！！」

俺は慌てて部屋を飛び出した。

「祐一、ひどいよ。さっきわたしとは遊ばないっていったのに。はい、4」

「だから悪かったっていつてるだろ。

さすがにせつかく栞が来てくれたのに、追いつ返す訳にもいかないだろ。」

「じゃあ8」

「すみません、祐一さん。お勉強のお邪魔をしてしまったみたいで・・・
それでは、クイーンでいきます」

「いや、別にいいよ。ちょっと息ぬきもしたかったからな」

テーブルを囲んで、今俺達は居間でトランプに興じていた。

ちなみにやっているゲームは、トランプの「大富豪」である。

名雪のマイブームとなっているゲームだ。

「でも、こうして皆でトランプをやるのって楽しいよね。はい、エース！」

「くはあ、持っていたのか！・・・パス」

「私もありません・・・」

「じゃあ次もわたしからね、キング♪」

「く・・・栞、反撃しろ！！また名雪にやられるぞ！！」

ちなみに今現在、5戦やっているが、「大富豪」の座は名雪の不動のものとなっている。

「うう、私も絵札、持ってません・・・」

「そんなこという人、嫌いです」

「祐一さん、私の台詞とらないでください！」

「じゃあ、二人はないっていう事でこれで終わり。
次、また私ね。クイーン♪」

「おのれー！！なんで絵札ばかりなんだ！！」

「そうです！私達、カス札ばかりですよ！！」

俺と栞、二人の抗議にも名雪は涼しい顔をしていた。

こいつ、やたら運が強いからな・・・

「二人とも、出せる札はないの？」

「・・・パス・・・」

「じゃあこれであがりね」

名雪の最後の札で、勝負は幕を閉じた。

ま、また負けたし……

「朶！また負けたぞ！！」

「うう、名雪さん、強すぎます……」

「運がよかつたんだよ」

うーむ、謙遜しているようで実際に運が強いからな……

全然太刀打ちできなかったぞ。

「とりあえず一時休憩しようぜ。さすがに疲れた」

「うん、じゃあ何か飲み物いれてくるね。」

朶ちゃん、コーヒーと紅茶、どっちがいいかな？」

「あ、どうもありがとうございます。私は紅茶をお願いします」

「うん、ちょっと待っててね！」

とたとたと、名雪は台所へ歩いていった……

「結構夢中になってしまったな・・・あれ、どうした、栞？」

「祐一さん、今日は突然おしかけてしまってすいません」

栞は少ししおらしげにしている。

勉強の邪魔をしたと思ってるのかな・・・？

「いいんだよ、どの道暑さでへばってた所だったからな。
栞が来てくれて、いい気分転換になったって」

「・・・そういつて頂けると嬉しいです。

どうしても、今日祐一さんに会いたくなりまして・・・」

少し頬を染めて、栞は言った。

くく、可愛いぞ、栞！

「俺もこうして栞に会って話ただけで、何かおちつくよ」

「祐一さんですか！？私もなんですよ」

話しているだけで穏やかになれる相手、か・・・

こうなのが・・・

「祐一、栞ちゃん、できたよ!」

「はいよ。じゃあいただくとしますか」

「はい!」

・・・・・・・・平和っていうんだろうな・・・・・・・・

< 終 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373j/>

恋のカレイドスコープ

2010年10月8日22時24分発行